

前原優希・大村優香・池永 恭・田邊あおは・
加瀬ちひろ・小玉敏也・福井智紀・植竹勝治

研究の背景と目的

- 水族館における常同行動の観察事例は少ない。
- 水族館飼育下の哺乳類における常同行動の発現状況を調査し、科学的データを得る。

研究・調査方法

調査場所：関東圏のJAZA加盟の水族館7施設

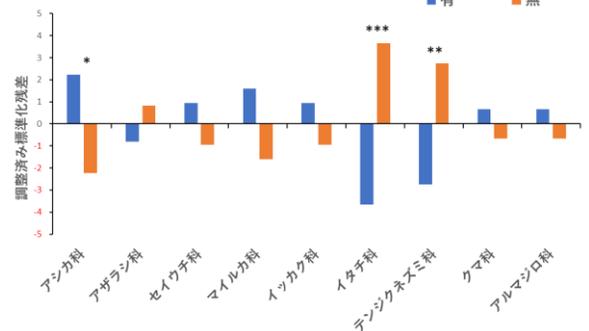
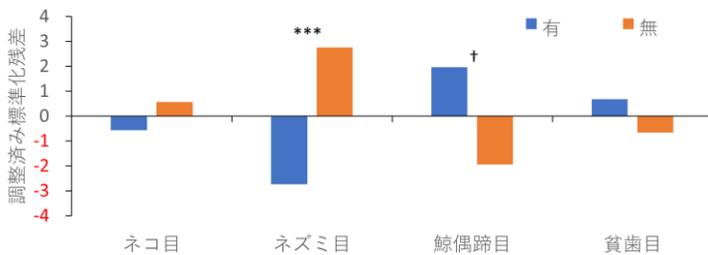
調査期間：2022年4月1日～2022年10月16日

供試動物：アシカ科11種、アザラシ科8種、セイウチ科2種、マイルカ科10種、イッカク科2種、
イタチ科6種、テンジクネズミ科3種、クマ科1種

観察方法：2グループで時間帯をずらし、目視とビデオ記録による各種10分間の連続観察

結果と考察

- 常同行動の発現割合は動物の“目”によって有意に異なった($\chi^2=10.24$, $p=0.017$)。特に鯨偶蹄目の発現割合が高かった(調整済み標準化残差1.958, $p=0.050$)。
- 常同行動の発現割合は動物の“科”によって有意に異なった($\chi^2=27.55$, $p=0.001$)。特にアシカ科の発現割合が有意に高かった(調整済み標準化残差2.231, $p=0.026$)。



- 鯨偶蹄目は野生での移動距離が長く、水族館の施設では行動できる範囲が狭すぎるため、常同行動が発現しやすいと考えられる。
- アシカ科の動物ではサークリングが多く見られ、展示施設の構造との関連が示唆される。
- 一方、イタチ科の動物は水中と陸地で活動できるような複雑な展示様式が取られており、常同行動の発現割合が有意に低かった(調整済み標準化残差-3.651, $p=0.000$)と考えられる。

これから

日本の水族館における展示様式のあり方について考えるとともに、海生哺乳類における常同行動の発生要因や対策について検討する。

- より詳細な常同行動発生要因の探索
- パフォーマンス (ショー) の有無による影響の調査
- 常同行動の重症度の評価
- 動物福祉に基づいた改善策の考案



【謝辞】本研究の調査に際して、ご協力を賜った 萱津希音様 に感謝申し上げます。